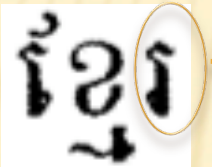
PAIK 2010年7月例会
2010年7月10日
於神戸女学院大学

カンボジア語における頭子音連続の序列について

桑本裕二
秋田工業高等専門学校

0．カンボジア語について

- 「カンボジア語」or「クメール語」?
- 英語表記 “Khmer”
- カンボジア語では k^hmae

  文字表記：  → 音価は /r/、黙字

  ae − k^h − r
  |
  m

- 「カンボジア」: kampuʔciʼə（公式名称）

その他の言語情報

- 系統は、オーストロアジア語族中のモン・クメール語族に属する。カンボジア王国の公用語。
- 言語人口：約1500万人
- SVO語順の孤立語である。
- Noun-Adjective の語順。

子音の音素目録

p	t	c	k	ʔ
p^h	t^h	c^h	k^h	
b	d			
m	n	ɲ	ŋ	
v	j			
	r			
	l			
(f)	s			h

(外来語のみ)

音節構造

- CV, CVC, CCV, CCVC
- オンセットは義務的、二重子音まで許容（ONSETは支配的）
- 母音（9種類、長ー短の区別あり）
  - 二重母音
  - 弛喉母音（←→緊喉母音）
- コーダは単子音のみ。/b, d, r, s, f/ は中和される。

1．本発表の論点

- カンボジア語のオンセットの二重子音の分布を観察。序列の特徴について考える。
  - 聞こえ度階層（調音様式、有声ー無声の対立）
  - 調音点の有標性に基づくもの（Place の有無 etc.）
  - 有気ー無気の対立
- コーダにおける子音の有標性との対照。

2. データと分析

[C_1C_2- の組み合わせ（1）

C_1＼C_2	p	t	c	k	ʔ	b	d	m
p		○	○	○	○		○	
t	○			○	○	○		○
c	○			○	○	○	○	○
k	○	○	○		○	○	○	○
s	○	○		○	○	○	○	○
ʔ								
m		○	○				○	
l	○			○	○	○		○

[C_1C_2- の組み合わせ（2）

C_1＼C_2	n	ɲ	ŋ	v	j	l	r	s	h
p	○	○	○		○	○	○	○	○
t	○		○	○		○	○		○
c	○		○	○		○	○		○
k	○	○	○	○	○	○	○	○	○
s	○	○	○	○		○	○		
ʔ				○					
m	○	○	○			○	○	○	○
l			○	○					○

聞こえ度階層と音節

- SON-SEQ: Complex onsets rise in sonority, and complex codas fall in sonority. (Kager 1999:267)
- 聞こえ度階層と音節について（Prince & Smolensky 2004:150ff.)）
- オンセットの聞こえ度階層の序列：
  - 調音様式に基づくもの
  - 有声-無声
- その他のファクター
  - 調音点の有標性に基づくもの（Place の有無 etc.）
  - 有気-無気 は？

調音様式に基づくオンセットの聞こえ度階層の序列：

[stop>>fricative>>nasal>>lateral>>glide>>vowel

はずれるもの：

sp-, st-, sk-, sʔ-, sb-, sd- （sC- の11通り中6）
mt-, mc-, md-, ms-, mh- （mC- の10通り中5）
lp-, lk-, lʔ-, lb-, lm-, lŋ-, lv-, lh- （lC- の8通り中8）

→ /s/ の特異性
→ /m/(nasal) の特異性（Kuwamoto 2004, 2006 桑本 2007）
→ /l/ の特異性（Kuwamoto 2008）

有声性に基づくオンセットの聞こえ度階層の序列：

[無声音>>有声音

はずれるもの（[有声音-無声音）:

mt-, mc-, ms-, mh-　　（mC- の10通り中4）

lp-, lk-, lʔ-, lh-　　（lC- の8通り中4）

PLACE の有無

- [placeあり >> placeなし　？
- place　のない分節音は /h/, /ʔ/
- これに反するのは、
  - [ʔv- のみ。 →実際には、ʔə̲vəi「何」のように schwa が挿入。

Place の有標性の問題

- Place の指定／未指定の問題

←平野 (1995, 1996)：朝鮮語のコーダの単子音化に関する分析

→Place 未指定=構造が単純（=無標）: [coronal] を含む子音（歯音、硬口蓋音など）

←→有標なもの：[labial] [dorsal]を含む子音（両唇音、軟口蓋音、口蓋垂音など）

Place の有標性に関する序列

- [両唇音, 軟口蓋音, その他の非口腔音 >>　歯音, 硬口蓋音

- →ほとんど分布に統一性がない　←ある意味で、コーダとの非対称性を示すことがいえる。

帯気音のかかわり（1）

- 坂本・峰岸 (1988) では、有気音 [p^h, t^h, c^h, k^h] は、C_1 における対応する無気音 [p, t, c, k] の異音と解釈
- C_2が /r/ のとき→ C_1は /p, t, c, k/ は無気音
  - pram 「5」
  - trəi 「魚」
  - kraoi 「うしろ」
- C_2が /r/ 以外のとき→ C_1の /p, t, c, k/ は有気音
  - p^htɛəh「家」
  - c^hmaː 「猫」
  - k^hɲom「私」

帯気音のかかわり（2）

- C_2には帯気音はほとんど表れない
  - skɔ̰ː　「砂糖」
  - mteːʔh「唐辛子」
  - （例外、少数）mp^{h}èi　「20」
- 単子音の場合、最小対立あり
  - paː̰　「父」　p^{h}aː̰　「布」
  - taː̰　「父」　t^{h}aː̰　「～と」
  - caː̰　「はい」　c^{h}aː̰　「炒める」
  - kaː̰　「仕事」　k^{h}aː̰　「巻く」

帯気音のかかわり（3）

- mh-, lh- もあり　（←帯気音の扱いではない）
- 文字体系の情報

- [C_1C_2- の序列について、aspiration のかかわりは？

  [有気音 >> 無気音　が成り立つか？

  →帯気性と聞こえ度の関係は？

参考：英語のオンセットの帯気音

- time [tʰaim] / stay [stei]
- pen [pʰen] / spoon [spuːn]

コーダの状況

- コーダの子音連続はない。
- 有声音/b/ /d/ を表す文字はそれぞれ /p/ /t/ に中和
- 有気音 /p^h/ /t^h/ /c^h/ /k^h/ を表す文字はそれぞれ /p/ /t/ /c/ /k/に中和
- /-r/ → ø　　/-s/ → /-h/
- /j/ → /i/　　/-v/ → /-w/ (/-u/)

4. まとめ

- カンボジア語オンセット子音連続の序列は非常に複雑であり、複合的に分析する必要がある。

  →OT分析の可能性

  McCarthy (2008) : Harmonic Serialism

  (McCarthy 2009, Tanaka 2009, Sasaki 2008)
- 聞こえ度と帯気性、調音点の有標性との、音節構造上における関連は？

謝辞

- インフォーマント：イット・ウィサル氏（秋田工業高等専門学校卒業生）
- 日本学術振興会科学研究費（基盤研究 (C), 課題番号21520422）

参考文献（1）

平野日出征 (1995)「素性構造の複雑性と子音の削除—朝鮮語を中心として—」『東北大学言語学論集』4:157-177.

平野日出征 (1996)「最適性理論と分節音削除現象」『東北大学言語学論集』5:1-17.

Kager, René (1999) *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kuwamoto, Yuji (2004) Mora nasals and their syllables. *Tohoku Studies in Linguistics* 13:13-21.

Kuwamoto, Yuji (2006) The status of [nasal] in syllable endings: Evidence from gender alterations in French and Portuguese. *Phonological Studies* 9:59-66.

参考文献（2）

桑本裕二 (2007)「音節末における側面音のソノリティーおよび音節構造との関わりについて –フランス語からの形態音韻的考察–」『日本言語学会第134回大会予稿集』258- 263.

Kuwamoto, Yuji (2008) Coda cluster simplification and the emergence of sonorants in Korean. *Tohoku Studies in Linguistics* 17:69-78.

桑本裕二 (印刷中)「音節末端部における子音連続の回避と保持の条件」『東北大学言語学論集』19:(13p.)

McCarthy, John J. (2008) The gradual path to cluster simplification. *Phonology* 25:271-319.

参考文献（3）

McCarthy, John J. (2009) Studying GEN. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 13(2):3-12.

Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.

坂本恭章・峰岸真琴 (1988)「クメール語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典』第1巻　世界言語編（上）:1479-1505. 東京：三省堂.

Sasaki, Kan (2008) Hardening alternation in the Mitsukaido dialect of Japan. *Gengo Kenkyu* 134:85-118.

Tanaka, Shin-ichi (2009) Origin of typological gaps in parallel and serial OT. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 13(2):13-21.

上田広美 (2002)『エクスプレス カンボジア語』東京：白水社.